



PISA

IN FOCUS

23

education policy education policy education policy education policy education policy education policy education policy

生徒は、後期中等教育学校卒業後の進路をどのように考えているのだろうか？

- 大学を卒業すると考えている生徒の割合が最も高いのは韓国(80%)で、最も低いのはラトビア(25%)である。
- 多くの成績優秀な生徒が大学への進学を考えておらず、もしそうなれば、経済や社会にとって潜在的な才能の損失となる。一方で、成績が振るわない多くの生徒が、現在の成績では合格しそうにない場合でも、なんとか大学へ行けると考えている。
- 生徒のほぼ4人に1人は後期中等教育段階で学校教育を終えると考えており、従って社会人へ円滑に移行するためのスキルを必要としている。

教育システムは、技能と才能を労働市場へ向けさせ、若者の未成年から成人期への移行を助ける上で重要な役割を果たす。学校システムの課題は、この移行を効果的に導くことである。このプロセスは早い段階から始まり、その中で生徒が自分自身と自分の将来について期待をふくらませていく。学校システムはこうした期待を巧みに扱って、生徒の技能と関心が経済及び社会の中で適切な対象を見出せるようにしなければならない。

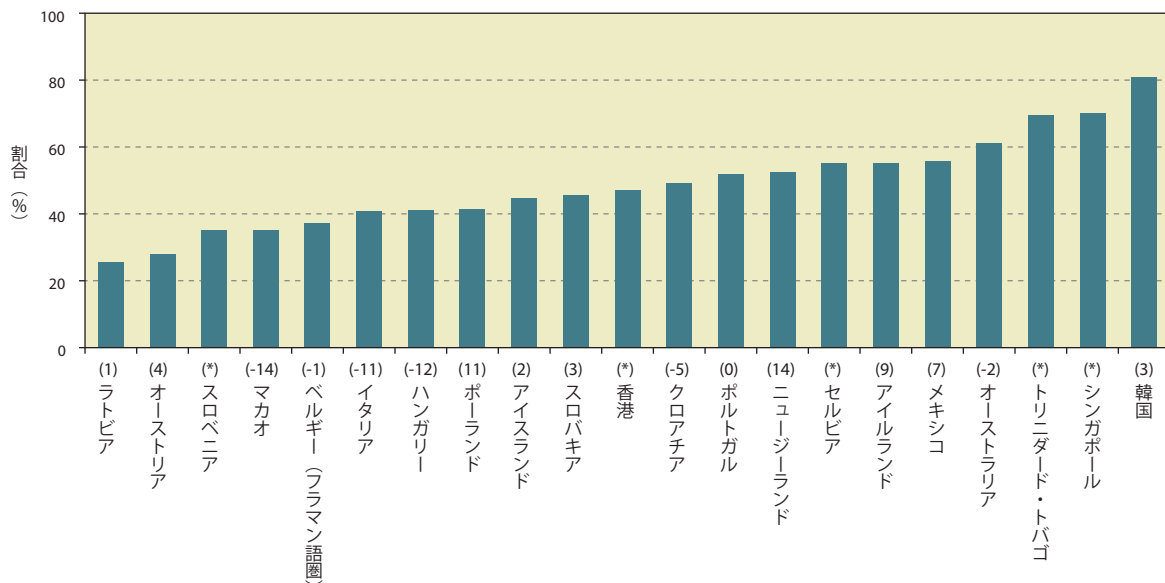
PISA2009年調査では、国際オプションとして実施された教育歴質問紙(訳注:日本では実施していない)において、このオプションに参加した21か国・地域の生徒に、自分はどの教育段階まで修了すると思うかを尋ねた。回答は国・地域によって大きく異なり、大学と回答した15歳の生徒は、ラトビアで4人に1人だけだったのに対し、韓国では5人のうち4人であった。オーストラリア、シンガポール及びトリニダード・トバゴでは、生徒の60%以上が大学と回答したが、オーストリア、ベルギー(フラマン語圏)、マカオ及びスロベニアでは、大学と回答した生徒は40%に満たなかった。PISA2003年調査以降、ニュージーランドとポーランドではこの間に大学と回答した生徒の割合が急増しているが、香港、ハンガリー、イタリア及びマカオではこの割合が著しく低下している。



PISA

IN FOCUS

大学を卒業すると考えている15歳児の割合



注: カッコ内の数字は、PISA2003年調査からPISA2009年調査にかけての、大学を卒業すると考えている生徒の割合の変化を示している。(*)は2003年調査データがない国・地域である。国・地域は、大学を卒業すると考えている生徒の割合の少ない順に左から並べている。

出典: OECD (2012), *Grade Expectations: How Marks and Education Policies Shape Students' Ambitions*, PISA, OECD Publishing, Table B1.1.

StatLink <http://dx.doi.org/10.1787/888932733279>

しかし、こうした予想は現実的だろうか？ 大体においてはそう言える。すべての国・地域で大学を卒業すると考えている生徒は、そう考えていない生徒よりも、数学的リテラシーと読解力において明らかに優秀な成績を収めている。オーストラリア、オーストリア、ベルギー（フラマン語圏）、クロアチア、ハンガリー及びスロバキアでは、読解力における両者の得点差が90点を超え、学校教育2年分以上に相当する著しい違いとなっている。これより小さい（50点）とはいえ、やはり著しい違いがあるのは香港とマカオである。また、大学を卒業すると考えている生徒は、職業教育プログラムよりも普通教育プログラムに参加する傾向

もみられる。例えば、クロアチア、ベルギー（フラマン語圏）、ハンガリー、韓国、セルビア及びスロバキアでは、普通教育プログラムに在学し、大学を卒業することを考えている生徒の割合と、職業教育プログラムに在学し、大学を卒業することを考えている生徒の割合との間に、少なくとも40ポイントの違いがある。こうした国々では、職業教育プログラムに参加する生徒は、大学に合格して優秀な成績を収めるとは思えないと感じているか、あるいは他の職業を選択することを望み、自分の期待をそれに相応しいものに行っているのである。

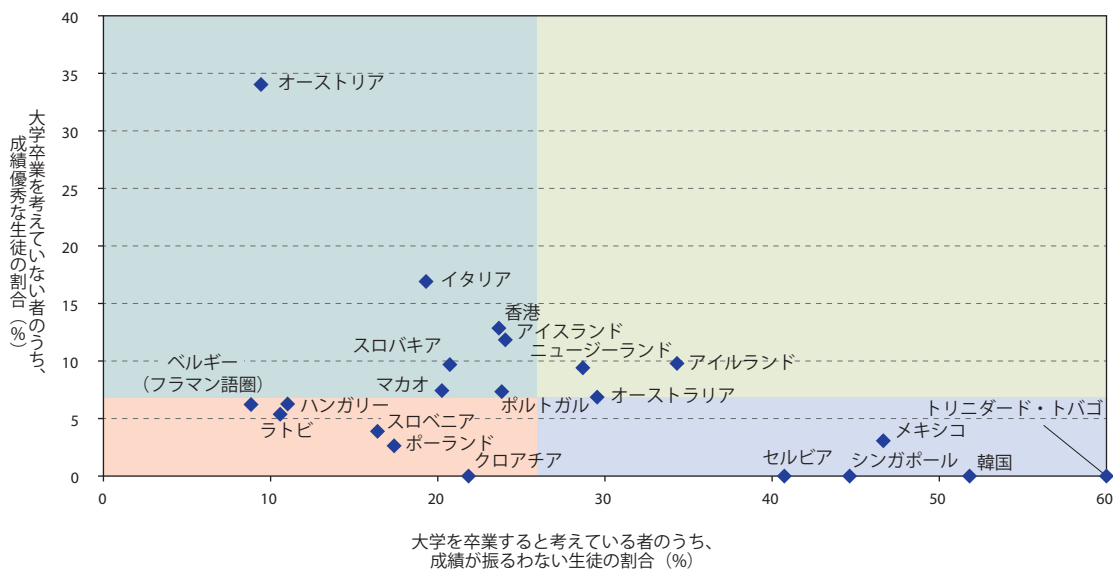


しかし、すべての国で、期待が当人の現在の能力に見合わない生徒がかなりの割合で存在する。一部の成績不振の生徒や職業教育プログラムに参加している生徒が大学を卒業することを考えている一方で、高等教育でも良い成績を収める可能性が非常に高い、成績優秀な生徒の一部は大学卒業を考えていない。大学卒業を考えている生徒で、成績が振るわない生徒の割合が比較的高いのは、オーストラリア、アイルランド、韓国、メキシコ、セルビア、シンガポール及びトリニダード・トバゴである。従って、これらの学校システムでは、学校との関わりを深めることを奨励するとともに、より良い学習の機会を提供することによって、教育を継続したいという生徒の希望を十分に

活かす必要があり、たとえ今現在は成績が振るわなくても、やる気のある生徒は成績が向上し、優秀な生徒になる可能性がある。

中等後教育への進学を考えていない成績優秀な生徒の割合が比較的高く、10%以上であるのは、オーストリア、香港、アイスランド及びイタリアである。これらの学校システムでは、数ある対策の中でも特に学校との関わりを強化することや、生徒を普通教育プログラムや職業教育プログラムに分ける際に、生徒の家庭環境ではなく成績に基づいて分けることで、生徒の期待を高めることを目指すべきである。

生徒の学校での成績と将来の教育に対する期待との関係



注: 成績優秀な生徒とはPISA調査の読解力の習熟度レベルが4以上、成績が振るわない生徒は同レベルが2以下の生徒である。各象限の境界線は、国・地域の平均である。クロアチア、韓国、セルビア、シンガポール、トリニダード・トバゴは、対象数が少なすぎて信頼できる推定値を得られない(ただし、国際平均算出の際には含める)。出典: OECD (2012), *Grade Expectations: How Marks and Education Policies Shape Students' Ambitions*, PISA, OECD Publishing, Table B1.4.

StatLink <http://dx.doi.org/10.1787/888932733336>



PISA

IN FOCUS

職業教育プログラムの生徒が大学の学位取得を難しいと思う理由としては、受けてきた学校教育がこの目的のためには不十分であるか、あるいはそうすることに対する構造的な障害があるためだと考えられる。アイルランド、韓国、セルビア及びトリニダード・トバゴでは、この種のプログラムに参加している生徒の40%以上が大学を卒業することを考えている。このような国では、ある特定の教育プログラムに入るのに、生徒の成績のみを考慮することも必要である。何故なら選抜の際に、ある種の家庭環境が他よりも有利な扱いを受けることがあれば、それは社会的不平等を助長し、経済と社会にとって才能の損失という結果を招く可能性があるからである。

大学の学位には、一般教養課程と専門課程が含まれるが、技術または職業訓練の中等後教育機関の学位は含まれない。

ほとんどの学校システムでは高等教育へのアクセスの拡大に努めているが、生徒のおよそ25%は高等学校の終了時点で学校教育を終えたと考えている。教育システムは、こうした生徒に、労働市場及び成人期への円滑な移行に必要なスキルを備えさせなければならない。後期中等教育段階で学業を終え、卒業後はおそらく就職すると考えている割合が最も高いのは、オーストリア(53%)、スロバキア(40%)、イタリア(39%)及びクロアチア(34%)である。後期中等教育の学歴しかない人々の失業率が高く、特に15歳～24歳で高いことから、このグループの生徒はほとんどの国にとって大きな課題である。

結論:教育システムは、生徒の高い期待に応えるために必要なスキルを身に付けさせるとともに、知識基盤経済の需要に応えるためにその期待を高めなければならない。また、大学進学を考えていない生徒には、関連するスキルの学習機会を十分に提供しなければならない。

本稿に関するお問い合わせ先

担当: Guillermo Montt (Guillermo.MONTT@oecd.org)

出典: OECD (2012), *Grade Expectations: How Marks and Education Policies Shape Students' Ambitions*, PISA, OECD Publishing.

参考サイト:
www.pisa.oecd.org
www.oecd.org/pisa/infocus

次回テーマ:

「生徒は学校についてどう思っているのだろうか？」

本稿の翻訳は、日本のPISAナショナルセンターが担当しました。